

はじめに

解剖学の授業が始まる前、ほとんどの学生さんの胸中は「どんな授業だろう」という期待と不安に満ちている。ところが、教科書には見たこともない構造の名称が羅列されているため、ほぼ全員が「これを全部覚えるのか」と、暗澹たる気持ちになるようだ。実際、200個を超える骨やその部位の名称、300個以上の筋の名称・起始・停止・支配神経等々、今人気のグループ「〇〇〇48」の全員の名前よりもはるかに多い名称が洪水のように襲ってくるのだから。

一方、すぐに疾病についての授業があると思っていた方は、延々と続く解剖学は単調で「裏切られた」と感じるらしい。とくに「自分が進む領域とは関係ない」と思っている学生さんにとっては、解剖学は「ノルマ」以外の何物でもない。

本書は、比較的良好に知られる「疾病」をもとに、関係する解剖学的内容をイメージ化することを目指している。平たく言えば「この疾患では身体のここが障害されてこんな症状になる」ということを解剖学で説明しようと試みたものである。したがって、いわゆる家庭医学の本でも臨床医学の本でもなし、解剖学書と大見得を切るほどのものでもない（病気の説明も解剖学の内容も不十分だから…）。

では「何の本か」と言うと、実は著者が行っている授業内容からテーマを選択した本である。言い換えれば「わたしの解剖学の授業ノート」であり「解剖学授業のネタ帳」とも言える。もちろん、臨床医ではないので、すべての疾患を網羅することはできないし、最新の臨床知識という訳にもいかないが、臨床科目と解剖学との関連を少しでも理解していただければと思っている。本書により「解剖学と臨床医学が結びつかない！」と感じている学生さんが「なるほど！」を経験し、最小限の努力で「ノルマ」をこなしてもらえれば文字通り「充分」である。

本書の医療画像については、著者の大学時代の同級生である土屋一洋先生（杏林大学放射線医学教室）そして同教室の先生方に全面的にお世話になった。日本だけでなく世界を飛び回る合間に、無茶な注文の写真を探索して下さっただけでなく、写真と本文との整合性や説明不足などの監修までしていただき、御礼の申し上げようもない。その他にも、各節のアイデアや画像など無理を承知で手配して下さった諸先生に厚く御礼申し上げる。

最後、本書の企画・出版にあたっては、株式会社羊土社の鈴木美奈子氏、溝井レナ氏に全面的にお世話いただいた。本来なら1年近く前に完成すべき原稿が遅れ「出版前に頓挫！」の噂までとんだが、筆の遅い著者を羊のように(?)引っ張って下さったお2人に改めて深甚なる謝意を申し上げたい。

2011年6月

松村讓兒